

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	櫻田智恵
論文題目	「国王神話」の形成過程—タイ国王の行幸と「陛下の映画」の役割—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、タイの9世王プーミポンアドゥンヤデート(1927-2016年、在位1946-2016年)が、国民から敬愛を集めて、絶大な政治的権威を獲得する過程を描き出そうという試みである。多くの人々は学校教育やメディアが拡散するイメージを通じてプーミポン国王を敬愛している。そのイメージは国王崩御後も再生産され続け、プーミポン国王は神話になりつつある。本論文は、地方行幸が人々に国王への敬愛を抱かせ、その神話の形成と再生産の鍵になっていると位置づけて、行幸を包括的に分析している。</p> <p>第1章では、近代以後のタイの王朝を取り巻く歴史が叙述される。19世紀後半に築き上げられた絶対王政は、1932年の革命で立憲君主制へと変化する。君主と取り巻きは、低下した権威の回復を目指すようになる。この作業を中心となって担ったプーミポン国王による権威確立過程を政治史と照らし合わせながら概観する。</p> <p>第2章では、プーミポン国王神話の内容を整理する。複数のイメージが互いに補強し合って人物像が作り上げられている。科学者、芸術家、灌漑専門家、英邁、高德といった具合に複合的であるがゆえに、どんな局面でもそれに合致したプーミポン国王のイメージを語るができる。そうしたイメージが学校教育や御真影を通じて広められたことを叙述している。</p> <p>第3章では、プーミポン国王の公務にはどのようなものがあるかを紹介し、公務の中では地方行幸がもっとも重視されていたことを示す。次に、どの時期に、どの地域へ、どのような形態で行幸していたのかを丁寧にたどる。それを通じて、行幸の回数は実際には公式発表よりも少ないこと、行幸先には偏りが大きいことを明らかにしている。また、プーミポン国王が身近な国王として自身を演出していたこと、それによって民衆から敬愛を獲得したこと、加えて1970年代半ばには民衆を訪問して大規模な奉迎を受けるスタイルから開発重視への転換が生じることを明らかにしている。</p> <p>第4章では、1955年に行き当たりばったりで始まった地方行幸が、奉迎の様式確立によって、国王と民衆の一体感を演出する場になっていく過程を描き出す。奉迎が盛大なセレモニーとして演出されたのである。民衆は奉迎によって臣民としての一体感を体験することになった。</p> <p>第5章では、奉迎の舞台裏が描かれる。初回の中部行幸では、想定外の出費や随行員の過大な負担といった問題が噴出していた。それを克服するために、奉迎セレモニーの様式が確立される過程を説明する。事前の清掃などの準備作業、当日の参集、国王賛歌演奏、万歳三唱、国王の演説、といったパターンが確立される。</p>			

第6章では、奉迎に参加していなくても、奉迎体験を共有できる仕組みとしての映画について述べられる。行幸する国王の姿を爆発的に拡散させたのは、国王を被写体とし、しかも国王自身が制作を指揮した「陛下の映画」であった。それが制作され上映される過程を詳述する。しかも、上映や鑑賞に当たっての正しい礼儀作法が定められ、民衆は鑑賞を通じて奉迎を擬似的に経験させられるようになった。

終章では、ここまでの議論を要約する。なぜ人々がプーミポン国王を敬愛するようになったのかという問いについて、実際の行幸と映画の二本立てであったという答えを提示する。a)1950年代に始まる地方行幸において民衆が拝礼するような奉迎方法を確立し、b)行幸の様子を撮影した映画を民衆に拝礼するような作法で鑑賞させた。この2つが噛み合って、行幸は国王への敬愛を喚起する役割を有効に果たした。